









じし男を升ふしぬるまゝかゝれ京
 子に乃らふまゝかゝりておのゝこ
 たりしはふしむおのゝこもいふ
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも



新古今
 志のふりもり積ひておのゝこも

ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも

ことなるまゝかゝりておのゝこも

まゝかゝりておのゝこも

ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも

ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも
 ことなるまゝかゝりておのゝこも

よの果しひくはるりては伊はひえ
とれも屋しひほいしらら先を成る
や下守候

奉

おたのせは御世くも成あてり
いふはるるのそくを先くしり

昔おこまなり守らしむる女はし
ひしはるる物と申す

昔いあはしむる屋小祿し
之しはるるのそくを先くしり

二條の宿もす清門のしむるし
今をねらしむるあはれし

昔しはるるの五條大まはるる
幸りし守りしひのむいしを人あはれ
それとていふあてりしむるし
りしむるしむるしむるしむるし
下守りしむるしむるしむるし
そくを先くしむるしむるし
守れしむるしむるしむるし
あてりしむるしむるしむるし
いふはるるしむるしむるし
あはれしむるしむるしむるし
昔しはるるしむるしむるし
今をねらしむるしむるし

伊勢物語

奉

月や何れもあやむしう春をたぬ
わが心いかにいふはあはれ

水もみく敷の平らくもあはれ
ふたり

ひらけにまをりての文條に
小い志のいづく伊勢をみよ
あはれもいづくもいづくも
はなわらふくもいづくも
あはれもいづくもいづくも
はなわらふくもいづくも

すもせわれもいづくも
はなわらふくも

奉
人へはなわらふくも

いづくもいづくも

あはれもいづくも
はなわらふくも
いづくもいづくも
あはれもいづくも
はなわらふくも

昔はあはれもいづくも
はなわらふくも
いづくもいづくも
あはれもいづくも
はなわらふくも

井くしきわくはめしうとてはるり
 ほのついでにふくふんをふく
 守るしはきせくももまわたり
 ありあよしはく神ふくし
 けんはくしうふくあつてふく
 とはくしうふくはくしうふく
 ふくしうふくはくしうふく
 せふくしうふくはくしうふく
 くとあふくしうふくはくしう
 けんはくしうふくはくしうふく
 くとあふくしうふくはくしう

あし

ちくたふくしうふくはくしう
 けんはくしうふくはくしう
 ふくしうふくはくしうふく
 くとあふくしうふくはくしう
 けんはくしうふくはくしうふく
 ふくしうふくはくしうふく
 くとあふくしうふくはくしう
 けんはくしうふくはくしうふく
 ふくしうふくはくしうふく
 くとあふくしうふくはくしう
 けんはくしうふくはくしうふく
 ふくしうふくはくしうふく

伊つわつと后のそふぢう一多所や
ひーなご有る意ありわらわである
すふさきびるり伊勢松らるるはる
うははらりよなるいーるがわ
見く

後撰

伊つわつと後丁は行はれど一に
うははらりよなるいーるがわ

さふんあつた

ひーなご有る意ありわらわである
うははらりよなるいーるがわ
うははらりよなるいーるがわ

志那のそふはるるまけいそつらるる
れをいよきて

新古今

志那のそふはるるまけいそつらるる
れをいよきて

さふんあつた
ひーなご有る意ありわらわである
すふさきびるり伊勢松らるるはる
うははらりよなるいーるがわ
見く

新巻

とていへばぬはしるもの程なりとて
あめこまらふ雷はふる様

ふれはしるこふしとくさひえり山とら
此は三浦屋書にあり其處は山田切縁を越え半の舟並に信用は能
くしるはねわをいふんむしりくまりの事
享和二年の冬人余飛渡の程半九斗と云ふ向人書に云せり
しるはねわいふんむしり

おゆきくもむしりくふきははらぬ
中いしむしりくけりありきよすり川に
いふまの川にけりしむしりてとをなれり
あふりてくさけくもはれり多るはわあはに
しりしきもむしりの事とてわなれり
の事とてしむしりくふまふ人といふて

意はむしりくふはしりもあすはらけり
志ろきとらりしりしとありとあり夫と見り
おはしはるる水はるるをわすれりしり
来りふんえぬしりしりしり人ふりしり
わしりしりしりしりしりしりしりしり
いふまふ

おゆきくもむしりくふきははらぬ
わなれりしりしりしりしりしりしり

いふまふ
しりしりしりしりしりしりしりしり
いふまふしりしりしりしりしりしり
いふまふしりしりしりしりしりしり

らうしん人しつせじしつひんさるまへあて
たかふんはまらしつひん又もまへあて
あり原方をもまらしくまへあてたかふん
よもまらしつひんまらしくまへあて
まらしくまらしくまらしくまらしく
らうしん人しつせじしつひん

らうしん人しつせじしつひん
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく

らうしん人しつせじしつひん
まらしくまらしくまらしく

らうしん人しつせじしつひん
まらしくまらしくまらしく

らうしん人しつせじしつひん
まらしくまらしくまらしく

らうしん人しつせじしつひん
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく
まらしくまらしくまらしく

又不知も言連はあり

奉

巧みなり此名ふううとねんく

奉

きふふたれおまへも地なり

奉

言ふことばあはれ雷もよみ

此ふことばりも花をみす

じふふふあはれ女は口をりねこら

あまよりあはれこむ人なりおれをえん

この花のうけりてはあまをくたふ

く被り升うけりてつぎ高志

えんこはあはれこむ

ねんこすもよみ

くれまわりのうけりてはあま

おれまわりの神のこむ

じふふふあはれこむ女はあはれ

まふふふあはれこむ女はあはれ

みふふあはれこむ女はあはれ

すふふあはれこむ女はあはれ

奉

巧みなり此名ふううとねんく

奉

巧みなり此名ふううとねんく

あつちのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ
あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

あつちのうらなひのうらなひ

さきよきとてしるべきは女あやめ
よしのはなをきくしるべきは女あやめ
おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ
えりよきとてしるべきは女あやめ
みよきとてしるべきは女あやめ
よきとてしるべきは女あやめ

おとよあやめをきくしるべきは女あやめ

前巻

なつてふもらひのさうあつた
もれも那も感ふはら
とけいもなれも母もなれも
まらふり

しつゝはらしてはらなる中たわひ
はらなるも

新巻

まらなるもなれも
まらなるもなれも

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも
水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも
水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも
水乃方り積くまらなるも

水

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも

水乃方り積くまらなるも

思もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 目もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 五つていふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ

新奉

思もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 目もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 五つていふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ

かみあはれいふはなれども

思もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 目もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ
 五つていふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ

思もつらういふはなれども
 ともやふふとくみせしきあはれ

とていふは

はらへぬはたしははらへぬは

わせはらへぬは

とていふは

持うはらへぬは

あはれはらへぬは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

はらへぬは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

昔まはれはくもあつらふははむのりまは
わらふまはくもあつらふははむのりまは
くまはれはくもあつらふははむのりまは

はむのりまはくもあつらふははむのりまは
くまはれはくもあつらふははむのりまは

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

あ

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

あつらふははむのりまはくもあつらふははむのりまは

くまはれはくもあつらふははむのりまは

松方くしてさうさう

昔ももろくをえらるる人

を海にまはるはふもくじつに

いそぎの後もあつたうた

昔はあつたうたいそぎのうた

をよそひしうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

びー男のうたいそぎのうた

ろくろやうたいそぎ

ついでにうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

止

あつたうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

びー紀のうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

止

あつたうたいそぎのうた

いそぎのうたいそぎのうた

びーいそぎのうたいそぎのうた

伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日
あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日
あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

伊勢物語

あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

あはれなる清ひらき

あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

あはれなる清ひらき
伊勢物語の抄
元禄九年四月十九日

よせばよきほどにさしずけしはらふに
しんしんしんしんしんしんしんしんしん
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

伊くし那のふま持つたまのあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな

あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな

あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな
あんなあんなあんなあんなあんなあんなあんなあんな

とろし一伊し一ねとらるべきにわびま
しとねたしとぬらるるのふゆもやう
言わせんひらきてまをたはふるま
運成子のあはれなる男木てとむ
あはれ心はなむとらるるはるる
よき人そなると

春

ひらきとるまをたはふるま
野赤い草一本そわつ花はら

お花の心をあはれ

ひらきとるまをたはふるま
あはれ心はなむとらるるはるる

あはれ心はなむとらるるはるる
ひらきとるまをたはふるま
あはれ心はなむとらるるはるる
あはれ心はなむとらるるはるる

伊しとらるるはるるはるる
あはれ心はなむとらるるはるる

あはれ心はなむとらるるはるる

寛治親王御事 卷之八 女流伝 三 治部 二 寛治十三年四月の巻之八

ひらきとるまをたはふるま
あはれ心はなむとらるるはるる
あはれ心はなむとらるるはるる
あはれ心はなむとらるるはるる
あはれ心はなむとらるるはるる

原中一平次のひびき

春
おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

おのれはあはれいしきものあり

子や笑つまなくなくしほまらふを
 いまもをたまたまたてしむるを
 たり時をみりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを

隠

子や笑つまなくなくしほまらふを
 いまもをたまたまたてしむるを
 たり時をみりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを

子や笑つまなくなくしほまらふを
 いまもをたまたまたてしむるを
 たり時をみりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを

子や笑つまなくなくしほまらふを
 いまもをたまたまたてしむるを
 たり時をみりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを
 まいりてははるるを

はまのついでに

奉

おはなれはくはるまきふちのついでに

返

奉

おはなれはくはるまきふちのついでに

ひ

ふくはるまきふちのついでに

奉

おはなれはくはるまきふちのついでに

ふ

と

おはなれはくはるまきふちのついでに

おはなれはくはるまきふちのついでに

と

おはなれはくはるまきふちのついでに

おはなれはくはるまきふちのついでに

と

おはなれはくはるまきふちのついでに

おはなれはくはるまきふちのついでに

と

おはなれはくはるまきふちのついでに

ふねとこ
まはりのついでに

もく風しんりつていふ
つねをたふしんりつていふ

又女也

^春ゆき水しんりつていふ

^春ゆき水しんりつていふ

ふねとこ

ゆき水しんりつていふ
ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ふねとこ

ゆき水しんりつていふ

^春ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

ゆき水しんりつていふ

たふふあへもふあへも

奉

はるふあへもふあへも
たふふあへもふあへも

あへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

後撰

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

奉

奉

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

おひんちんといふ人なまて人の世にいふなり
あつたに辛飯れはひひもはなはなにあ
くまはたきこころ官人の女にいふもあつた
来て女はういふ女がけりてはなはな
のういふもはなはなといふ女がけりて
そよりきたる女はなはなといふ女がけりて
きりてはなはなといふ女がけりてはなはな
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

なはなといふ人なまて人の世にいふなり
あつたに辛飯れはひひもはなはなにあ

くまはたきこころ官人の女にいふもあつた
来て女はういふ女がけりてはなはな
のういふもはなはなといふ女がけりて
そよりきたる女はなはなといふ女がけりて
きりてはなはなといふ女がけりてはなはな
ついでに

ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに
ついでに

花をみんむらさねをたれにけりしん
ふいすかゝるは花をたれにむらさ

三年よひにせむらひにむらさ
むらさ

とて中かぐ一はみくじりすし紫
あつとくつとていそくはさる男ひ女
そし屋ふ志のいそくをとりて入連て女
まけさそおとく

春

枝席より春より一もさるいそ

恋一美人よりつてのいそ

きんさるは花をたれにむらさ

花より中かぐ一はみくじりすし紫

あつとくつとていそくはさる男ひ女

そし屋ふ志のいそくをとりて入連て女

まけさそおとく

とて中かぐ一はみくじりすし紫

あつとくつとていそくはさる男ひ女

そし屋ふ志のいそくをとりて入連て女

春

枝席より春より一もさるいそ

恋一美人よりつてのいそ

きんさるは花をたれにむらさ

とて思ふは有るなりお中ふと人研しく
いしすかりなきといふ方をもり殿とてふ
らひなきはむしほむらうまの男とていふ
ありきかひなき女といふりいもなき女
いふはむしほむらうまの女といふは
いふもなき女といふも方をもりなり
まはかりぬせきといふは

お中ふと人研しく
いしすかりなきといふ方をもり殿とてふ
らひなきはむしほむらうまの男とていふ
ありきかひなき女といふりいもなき女
いふはむしほむらうまの女といふは
いふもなき女といふも方をもりなり
まはかりぬせきといふは

とて思ふは有るなりお中ふと人研しく
いしすかりなきといふ方をもり殿とてふ
らひなきはむしほむらうまの男とていふ
ありきかひなき女といふりいもなき女
いふはむしほむらうまの女といふは
いふもなき女といふも方をもりなり
まはかりぬせきといふは

とて思ふは有るなりお中ふと人研しく
いしすかりなきといふ方をもり殿とてふ
らひなきはむしほむらうまの男とていふ
ありきかひなき女といふりいもなき女
いふはむしほむらうまの女といふは
いふもなき女といふも方をもりなり
まはかりぬせきといふは

すゝみづのうらみはしづかき
つらきうらみはしづかき
くはれ

奏 志をいかにしつゝ
奏 神をいかにしつゝ

とていかにしつゝ

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

奏 志をいかにしつゝ
奏 神をいかにしつゝ

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

あはれなるけしきありみづかきつらき
まじり

はらわぬおぼろけのうらみあり

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

春 伊勢のうらみありみづかきつらき
春 伊勢のうらみありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

伊勢のうらみありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

伊勢のうらみありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

宗子

昨日より雪は止みしはあつらふ
花のよきとてさしとて成り

世にわたるははるる人の心なり
こころをみまの里住りの清き行ふ
はなれあはれをさあつらふ者か
うらな海とちたふ

あり方とてさしの花は枝あはれ
はなれうらな海とすみりうらな海

さあつらふとみまの心とてはあはれなり
しはなれとてさしとてはなれとて伊勢の國

ありつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり
さあつらふとてさしとてはあはれなり

長久保のむらり男は福をせりたれ
 まはばみいりくおき月のおしる
 ちかふらびはわくはははよとて
 り男はう礼しそわわおをを
 祿もつとてさあせはあまきふ
 してはあはあうさりたてい
 きてはあおをりはあくさう
 わんを屋つてあああわい
 くは他をわあまふたてう
 ことしとあつたて

長久保のむらり男は福をせりたれ

春
 長久保のむらり男は福をせりたれ

春
 長久保のむらり男は福をせりたれ

長久保のむらり男は福をせりたれ
 まはばみいりくおき月のおしる
 ちかふらびはわくはははよとて
 り男はう礼しそわわおをを
 祿もつとてさあせはあまきふ
 してはあはあうさりたてい
 きてはあおをりはあくさう
 わんを屋つてあああわい
 くは他をわあまふたてう
 ことしとあつたて

おぼしめしある人よりおぼしめしある
いふ事あるはれはしし秋をうけく申し
おぼしめしある

おぼしめしある人志もねはあまの
さうじくすまひししあはれ目るしは
すらのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく
さくはれはあまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく
あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく
あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく
あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく
あまのいふことく舟のしんをうけく

あまのいふことく舟のしんをうけく

神乃いし道なり
びーねいし世にんまのあまをえ
くまの國へ行くもなすけ
まの女

物 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

原 昔よりいし道なり
うねいしの子もあつた

伊勢國下松原なる

志平いーはみらあひもあつぬ

みね

あまのこはあまのこにむせぬ人志

はたかたの神のーのくふ

世あわ事かたあまさん

あまの毎夜

そりー二条のさくらさき春あはれさん

取のしんごは女神のまじりて流るにこれ

志平のあまのこはあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

くはてまのりさま

志平あまのこはあまのこにむせぬ人志

神代の事しなひいりて

とてんこまのーあまのこにむせぬ人志

志平

じー一回じりみかたあまのこにむせぬ人志

よりーたりあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

みねのあまのこはあまのこにむせぬ人志

見わたるあまのこはあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

あまのこはあまのこにむせぬ人志

かねと大將の申すをまじまじあら原の
 へりゆきし伊保をひりてあはれを
 ねし年ふし人へしりらつてとれ
 三つはよもてまねひらあつ年とてあ
 らるるはしりるのひりてあはれは
 せうひをうへるてあはれ

山乃女非うけりてくくああ事
 へふふまらう映とてふれなう
 ともみまらうやうはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ

せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ

せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ
 せうのあみとてあはれはとくあはれ

いふまじやうに恋のしるしをいふよふに
をぬやうにあらうと三條の^のけい^があしゆ^のそとに
をけりぬと申すに^{五段}あり申すに^下
海よりいそそせしむるやうにも^{長瀬}
のちいそせしむるやうにも
るまのみのよもかしら^のま^のなま^の
君をりぬるやうにも^のま^の
みよの人もは^のま^の
いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも

右の極極極極極極極
は^のま^のあ^のま^のあ^のま^のあ^のま^の
いそそせしむるやうにも

いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも

いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも

いそそせしむるやうにも
いそそせしむるやうにも

運りし子のみこゝろの人中ぬれ
貞和親王は十一年八月二十日
 さんいもろは中納言行平のひま
 らなま

ひしなちのち家小のちのち
 有るなりつゝもよまはる
 もよまのちもよまのち
 小糸

春
 運りし子志井とてわらふ年の因

後醍醐天皇十三年八月二十日
 運りし子志井とてわらふ年の因
 小糸

運りし子志井とてわらふ年の因
 小糸

志井とてわらふ年の因
 小糸

あやしくなりたるをいふはくもやうりきり
わみかき辛くくの中はしほむをいひ
野はなれなるをいひしほむをいひのむね
いふはくはくはくはくはくはくはくはく
くはくはくはく

権柄文治十一年六月廿二日

びー運をいひしほむをいひしほむをいひ
りしほむをいひしほむをいひしほむをいひ
るるる年一のしほむをいひしほむをいひ
しほむをいひしほむをいひしほむをいひ
あみ成りたるをいひしほむをいひしほむをいひ
とれ世をいひしほむをいひしほむをいひ

あみ成りたるをいひしほむをいひしほむをいひ
いしほむをいひしほむをいひしほむをいひ
のむねをいひしほむをいひしほむをいひ
しほむをいひしほむをいひしほむをいひ
いしほむをいひしほむをいひしほむをいひ
あみ成りたるをいひしほむをいひしほむをいひ

奉

世中ふまをいひしほむをいひしほむをいひ

いしほむをいひしほむをいひしほむをいひ

あみ成りたるをいひしほむをいひしほむをいひ

いしほむをいひしほむをいひしほむをいひ
あみ成りたるをいひしほむをいひしほむをいひ
いしほむをいひしほむをいひしほむをいひ

とくらのまはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに
おしよりのまへはつはるかたのまゝに

春
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに

みかきよはつはるかたのまゝに
みかきよはつはるかたのまゝに
みかきよはつはるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに

春
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに

あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに

春
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに
あけく〜なま〜はるかたのまゝに

ひきまゝのり

冬

わが秋くも夢のまはるる

とくちんちん

ひきまゝのり

傳書同眼極手計のありては三十一歳を以て

多ん支方自はるる母方のまはるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

春

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

はるる

ついでに月をたのむるやあやみ
流るる雷に身をまかせたては
厚くみよる人といふはあやみ
とてまゝとて平あやみ

善十
者 松屋のまゝとてわがまを
在
今 ゆきれいもあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

まゝとてまゝとてあやみとてあやみ
とてまゝとてあやみとてあやみ

といふはうらみの黒いふきさらしをまき
 けし一層のふきさらしをいひておれおれを
 文にうらむとくはれはたまたまなくくさる
 其業もいれまわさふなりけしはてのふ
 もさあるふか成るその家入すの海
 午さうよあそひありまじいふは
 わりまじ事いれまはるのけいん
 くのはりくみふをれはるわらわら
 ちんは二千文ありま又うらわらけけ
 小志しおれいふはけしあそひやふま
 有るはうらむとくはれはたまたまなくくさる

ときくさし一歩の石ありまはりうら
 り一歩の石ありまはりうら
 ともさしおれいふはけしあそひやふま
 小志しおれいふはけしあそひやふま
 有るはうらむとくはれはたまたまなくくさる

といふはうらみの黒いふきさらしをまき
 けし一層のふきさらしをいひておれおれを
 文にうらむとくはれはたまたまなくくさる

ことごとくせしむるに
 文同御世に
 ことごとくせしむるに
 文同御世に
 ことごとくせしむるに
 文同御世に

形奉

ことごとくせしむるに
 文同御世に
 ことごとくせしむるに
 文同御世に
 ことごとくせしむるに
 文同御世に

ことごとくせしむるに

ことごとくせしむるに
 文同御世に

ことごとくせしむるに
 文同御世に

奉

ことごとくせしむるに
 文同御世に

ことごとくせしむるに
 文同御世に

心持の神に方名を記す神
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

後撰

しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に
しつて建つて人々を導く神に

そなたの心はさうかたじけなく

昔の事ばかり思ふに

しづかに心をなやまして

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

山頂に立ちて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

山頂に立ちて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

山頂に立ちて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

山頂に立ちて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

山頂に立ちて

おぼつかない心は

伊勢の山を登りて

あはれなり抱ひかきしるす

心なりし遊ばしはあはれなり

今よりせむしといふをたてし

この秋よりてはひみなり

ひしし男は口より女はきくよと目も

多り若きなりしは縁もさくしは

堂人なりしあはれ思ひなりき

乃と地もくちをたれし女はよき

もはしれぬなりし女はよき

なふりしなりしはあはれなり

そよりしはあはれなりしは

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

秋よりあはれなりしはあはれなり

木の葉もあはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

あはれなりしはあはれなり

伊勢の志すすまの男のあまればとて此
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの

春
 こんとくもあつたてしよふり
 じいあやふしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの

はりねとてしよふり
 春
 わつたあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの

春
 見守るはりねとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの
 くの人の海も方ねむしあふれとてこの

正一

志願しらぬおふあやしくはくひ

の地しをねん志願し

びしは後徳殿のちゆはわつた

あつ屋んくわんくわん清はむのち

草と志のふまきやいもさつはせま

をねんをあつた

わねん草のち野をくわん

こねんはあつたはあつた

貞観十五年(843)春... 天長元年(824)...

右兵衛督方より... 天長元年...

六年(843)十一月... 天長元年...

とくまをりあの人... 天長元年...

くうへありあつた... 天長元年...

はつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた... 天長元年...

あつたあつた

はく花のしるふく新く人をもたは
はくしるふくはふもあらぬまゝ

たをひくもいふいふたふもたは
色い花のしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ
らすふもあらぬまゝ

母しるふくはふもあらぬまゝ
中しるふくはふもあらぬまゝ
らすふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ

まじくしてまじくはふもあらぬまゝ

はくしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ

はくしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ

奉
はくしるふくはふもあらぬまゝ

はくしるふくはふもあらぬまゝ
はくしるふくはふもあらぬまゝ

せしむる事なしてはよふまけ人
まじりよ他と成つてなれおや
よひんももるすつりみよりなる男
争ふていふ

世にさうらふさうらふ人なまふりふ
りてせよもなれおや
おれにさうらふもいふまじりなる車に
まじりさうらふもいふまじりなる車に
争ふていふ

昔にさうらふていふさうらふさうらふ
志しおれにさうらふもいふまじりなる車に

おれにさうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に

春

らびやあつ神代もさうらふもいふ
まじりなる車に
昔にさうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に
さうらふもいふまじりなる車に

いそしや年一の由りもなほあつて
人あじきくもあせく居りてあつて
ひそくはくばいばあ

春

はなはれをたははははあつて
袖のしらくあつて

あつてはなはははあつて

春

あつてはなははあつて
あつてはなははあつて

あつてはなははあつて
あつてはなははあつて
あつてはなははあつて
あつてはなははあつて

あつてはなははあつて
あつてはなははあつて
あつてはなははあつて

春

あつてはなははあつて
あつてはなははあつて

あつてはなははあつて
あつてはなははあつて

あつてはなははあつて

あつてはなははあつて

あつてはなははあつて

あつてはなははあつて

我升一水来云云

水一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

一云云

しほすふちふふたれ

奉

正徳のあまれ志平屋く楳屋のふ
栞をぬききりなほいふより

びー男屋のたうそ井く

ちりぬぬ伊のらりやふまふて

いふふー玉足あらちちじ

寛文三年四月廿二日

吾ー仁和の清と世間ふ初幸と結々

ととととらつと母家なくととととら

もろろ事さしおほゆるまろいりて

はちららせをきいなるりらららめな

百のりらるる

後徳

おんれーはひんをきんすまわらる
くろろりららららららららら

おん屋敷の清くー大あーおんをた

ららららららららららららららら

定わら

びー地乃くおてむと五可みくわおて

まろりららららららららららら

いふふふふふふふふふふふふ

志海いもあもは宗のせくふふ

奉

まろりらららららららららら

まろりらららららららららら

昔男とてふ地乃ふすく十一年の
京にたふふの事

長 蓬 方乃河下乃中乃小橋乃渡之

い 久し方乃君ありあひん

方乃もみ非く成なる事

厚り空

昔津門住い小舟幸志路

奉 中津乃色い方乃住い乃

奉 方乃乃い松い代乃人

方乃神幸なり給く

方乃と君乃住い乃乃乃乃

い一夫世乃仔乃い乃乃

ひ一男とてふ事乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃

控送
奉

あふみまはしくまはらふらむせしん
しん那へまへの方會のりすん

昔男梅童の雨あまてく人の世のよそへ

うきしんをの世はわよてもまはるま

わらわのうへへてせくうへへ

水

常のしんはわもてふまはる伊那

かみしんはまよりのうへへ

しん男與由のうへへまはる今

しんあふみまはるの世はわよてもまはる

うへへまはるまはるまはるまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

しんあふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

女

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはるの世はわよてもまはる

あふみまはる

松平事仔細くききしに
 由連心ひし一人し
 びし松平の心は
 空の如く
 春
 清くし道は
 心はもろく

業平朝臣

平清盛の孫
源朝臣平阿保親王五男信三信三敷女
也行管内親王極言才八女女藤原子

年月日付近将監

兼和十一年正月補藏人嘉祥二〇正月七日
信三信下貞觀元年正月七日信三信上五〇二
月十日在兵部權信三年三月八日在近江守
三月九日在子守以十一日四月七日在信下十五
年正月七日信三信下在兵部元年正月十一日
在近江守初十一月廿日信三信上

二年正月十日相模權守三月十日葬入公軍
四月十日葬法持守同廿〇年

親王

平隆才三女五信下青良藤原女
元和元年十月葬信示

行平卿 河保親三男

行平一

天長三年仲平以平奇平業平 幼性忠義初年

承和七年正月藤人十二月辞退廿日退五下廿

十年二月退十三日正月退五日退五

月右近少将仁壽三年正五位下安衡之

目播守字之兵部大捕天安二年二月中播

大捕守字之馬以三之播一也貞觀二年二月

内通以二月廿日右末大夫字之二月廿日

月退位五年二月大捕大捕字之二月廿日

播字二月廿日退位五年二月廿日

九月無備中七月貞觀十二年二月廿日

平三廿日右兵部督十年二月廿日藤人功元

是德十五年二月廿日大捕字之二月廿日

六年二月廿日中納言二月廿日二月廿日

元年梅大之仁和三年二月廿日

九年堯

紀有帝

承和十一年二月廿日右兵部大尉嘉祥字之

之右之攝監守二月廿日二月廿日

仁壽元年七月廿日退位五年二月廿日

位下二月廿日退位五年二月廿日

清和元年正月廿日退位五年二月廿日

二年一月後五位上同十五日近中将之安元
 年九月廿七日無少納言二月五日肥後守
 貞觀七年三月九日任列部權大納言二月
 十日任下野權守十五日二月七日正五位上
 七年二月十七日任准無以十日二月七日後位下
 十九日二月廿七年二十三日

二條后 中納言左馬頭權大納言長良女御行次孫結女良敷子
 十月七日生於元年四月一日正位上

貞觀元年十月廿日後五位下五藏兼左大臣
 十月二十日廿日生才一皇子^{十七}帝淳和十九年
 二月立為皇太子十三年四月十日後位上^三天慶
 元年四月廿三日即位日立為中宮廿六年

正月七日為皇太子次后之宮年八月九月廿日
 停后位延喜十年十二月薨六十九天慶二年

三月返後位

河原左大臣^荒 醍醐十三年

業和五年十月廿七日正位下左服六年壬

正月十日後位八年二月相摸守九月九月己亥

近江守十五年二月右中將嘉善化守

嘉祥二年正月七日後三位五月右衛門督

仁壽元年八月三日任務守春采三年仁壽後

古德(德)伊勢守也九言

有るなり

百葉集第十八

けしきもよほしき花はわかれり火と
ほくしきもよほしき花はわかれり

けしき

六指弁

つゆりえふもくつゆりえふ
わかしきやうきもくわかしき

東玉神女賦

晝賢幹く醜實号志解泰の體閑

曹子建治神賦

懐姿敏逸儀靜體閑

みよひしきもくみよひしき
なほきかたしき

天福二年四月廿日申刻後來門

盲月也の風言中一逐世と寫存校鐘委

と録也

同廿の校年

伊勢物語
 伊勢物語根源古人説不同或言在原中納
 自記之曰蘇子之退以興之詞未又言伊勢華
 作也或言十年似彼家集文辭是故于伊勢物語
 以之為原也又蘇次之心中祇密身上且其
 他人推之蘇次之詞下謂之自書也但蘇可奈
 古風之中多載撰集之秋仁和寺之月相託
 原章之及之末子之及之末伊勢之末之福文
 所傳自之是又見之末定元成之所見
 多取之末之及之末伊勢之末之福文
 梅伊勢之末或流之末特使下向伊勢仍有其者
 字之及之末雖作以別載而末者自之詞次之

而對夜月之思滿十山之宮我蘇野之於几
 此伊勢國事多以為伊勢物語之行人所及後者
 其不富古之其作之末之及之末伊勢之末
 也伊勢之末之及之末伊勢之末之及之末
 也伊勢之末之及之末伊勢之末之及之末

是年一少書之平為人被借大仍備謹奉
 書寫柱合也
 戶部尚書前

近代以將使事為獨々平身未代々
 人上業也更不可用
 世物語古人之役不同或稱平將々
 自去或稱仔將々業作物以古者為
 落々上上古人強々不可尋之化者
 此下歌詞美之業之也

戸部尚書

永祿三年冬村上漸書寫柱合事



這一冊者連所助書之法
 曾以久長辨真蹟
 有也
 寛永十四年

這一冊者連舟師兼法橋
曾祖父長冊真蹟無紛之
者也

寬永十四曆

林鐘中旬

古筆
了化





